

トピックス

著者に訊く

—『執事とメイドの裏表』をめぐって—

坂口 美知子

12 年程前、グロウミス兄弟の『無名氏の日記』(1892) などイギリス 19 世紀末からのロウアー・ミドルクラスを扱おうとして果たせないで悶々としていた時、新井潤美氏の『階級に取りつかれた人びと—英国ミドルクラスの生活と意見』(中央公論新書、2001) に出会ってノックアウトされる思いがした。それ以来、『不機嫌なメアリー・ポピンズ—イギリス小説と映画から読む「階級」』(平凡社新書 2005)、『へそ曲がりの大英帝国』(平凡社新書 2008)、『自負と偏見のイギリス文化—J・オースティンの世界』(岩波新書 2008) と、新井氏の鋭敏かつ共感的な優しい眼差しに、引き込まれながら読ませていただいていた。

今回の『執事とメイドの裏表—イギリス文化における使用人のイメージ』(白水社、2011) は、イギリス BBC ドラマ『ダウントン・アビー』など主人と使用人双方に焦点を当てたドラマの大ヒットや 70 年代の人気ドラマ『アップステアーズ、ダウンステアーズ』のリバイバル、また、日本でも最高視聴率を記録したドラマ『家政婦のミタ』や漫画『黒執事』などとも同期して、非常に注目されるお仕事となっている。

*

坂口：このご著書ご執筆のきっかけをまずお聞きしたいと存じます。

新井：白水社の編集者の糟谷さんから、「使用人に焦点をあてて書いてくれませんか。」という企画書をいただきました。『不機嫌なメアリー・ポピンズ』で乳母のことについては書いたことがあったので、今回使用人全体について集中して書いてみようと思ったわけです。糟谷さんは以前フランス 19 世紀のステイタスシンボルであった馬車をめぐるリスペク

タビリティ希求を扱った、鹿島茂氏の『馬車が買いたい』にも関わっていらっしやったので、そういったロウアー・ミドルクラスの階級上昇願望などに興味をお持ちだったわけでした。また、雑誌のコーナーに「執事喫茶体験談を書きませんか。」ともお誘いいただき、編集者と池袋の執事喫茶に覆面取材を行ったこともありました。

坂口：執事喫茶とはどんなところだったのですか。メイド喫茶のカウンターパートのようなものでしたか。

新井：そのメイド喫茶のメイドさんが常連となっているような、比較的若い年齢層の女性が一人で来ているようなところでした。まずネットで予約をするときに、「お呼びするのは、『お嬢様』、『奥様』のどちらがよろしいですか。」といったことを選択しなければなりません。すると入店時に、「おかえりなさいませ、お嬢様」などとむかえてくれます。

坂口：執事たちは、いかがでしたか？

新井：中年の執事頭の人が出て、その下にいわゆる若いイケメンの執事たちがいるわけですが、立ち上がろうとすると「めっそうもない、お嬢様！」と椅子を引いてくれたり、紅茶を自分で注ごうとすると、「私がいたします」ととことこ走ってきて注いでくれたりはしますが、べったりと同席して相手をしてくれるわけではないので、一人で来ている人は手持無沙汰風で、皆さん本などを読んでおりました。執事たちは、まあバイト風で、服装や礼儀等もそれなりという感じですが、リピータも多いようで、「2時間 2000円 + 高い値段設定のお茶やケーキ代」でお嬢様気分が味わえ、帰るときには、「行ってらっしゃいませ、お嬢様」と送り出されたりするので、その世界に入り込める人には、手軽でそれなりによいかもと…全然私の趣味ではありませんでしたが…この本の取材ということで、学生が『黒執事』を全巻貸してくれたりしました。『メイちゃんの執事』は漫画もテレビドラマもちょっと最後までは見られませんでしたか…

坂口：P・G・ウッドハウスの「ジーヴス」シリーズにある完璧な執事とダメなご主人様の例を筆頭として、先生は、使用者がイギリス社会を裏側から支えてきた実態を各方面から探っていらっしやいます。先生ご自身、日本でいう中高生時代をイギリスの私立学校で過ごしていらっしや

いますが、先方で執事という人種に実際にお会いになったことはありませんか。

新井：直接的にそういう人にあつたことはありません。

坂口：今年3月にイギリスに行ったときに、地方のお屋敷跡をホテルにしたようなところに泊まったのですが、そのマネジャーは、マルタ島出身でメイフェアの「紳士のお宅」で執事をしていたと言っていました。そのホテルに働きに来ている地元の若者たちを非常に厳しく躰けていたのを垣間見て感心しました。

新井：昔から、ワーキングクラスである使用人が、お金を貯めて、下宿屋のオーナーとなってロウアー・ミドルクラスとなるといった、階級上昇の例がありました。子供を良い家に奉公にあげるといのは、行儀見習いという意味でも、ワーキングクラスの母親にはきわめて望ましいことであつたわけです。日本の文学作品にも谷崎潤一郎の『台所太平記』など使用人に焦点をあてた作品があります。

坂口：三島由紀夫の『豊饒の海 春の雪』にも、世の中の不条理を知悉し、起こり得るはずのない不測の事態に対する迅速で手堅い「繕い手」として、自らの存在価値を自負している蓼科という老女（女中頭）が出てきていましたね。

新井：また、家のどこにいつ現れても不自然でないという点で、**What the butler saw** というように、使用人であるからこそ見聞きできる秘密も多かったようですね。使用人、特にメイドは午前中にすべて仕事を終わらせていなくてはならず、ご主人様たちや来客からは見えない存在に徹する必要があつたので、とっさのときに隠れることのできる、壁と一体化して見える秘密の扉が、邸宅のいたるところに設置されていたといえます。

坂口：カズオ・イシグロ原作『日の名残り』の映画でも、執事スティーブンスが階段の途中の隠し扉から急に出てくるシーンがありました。

新井：そういった意味で、市原悦子のテレビドラマ『家政婦は見た』のように、日本の家政婦は先方の執事っぽいですね。この本の出版時期が、去年テレビドラマ『家政婦のミタ』が人気を博しているときだったので、うまく乗つたと言われたことがあります。あのドラマのなかで、そ

の時々に必要なものが次々と出てくる、ミタさんの大きな黒いバックは、メアリー・ポピンズのもの意識しているんでしょうね。

坂口：ミタさんはおいしい食事で子供たちを「餌付け」して、支配力を強めていました。

新井：食べ物と階級という問題もありますね。ワーキングクラス出身の乳母に育てられたアッパークラスの食物嗜好が、ワーキングクラスのものと同じになっていることがあるのは、ある意味道理でしょうね。

坂口：先生は、この本の第1章でふれられているように、旧約聖書から、本当に直近のドラマまでご研究の上に書かれていらっしゃるところに感嘆しております。この本の中で一番楽しんで書かれたところはどちらですか。

新井：やはり執事と従僕、そして乳母だったと思います。メイドと下男も楽しかったのですが、彼らは仕事や地位が細かく分かれている上に、役割も家によってまちまちだったりするため、情報を整理するのに苦労しました。『パメラ』とその人気、そしてリチャードソンによる改訂版について書くのは楽しかったのですが、「一番苦労した」のは、最初は料理人です。意外と文学作品の材料が無いので。有名フランス人シェフの話を入れたりして、話が拡散していった感がありますが、自分ではこれも書き始めて見ると面白かったです。ただ正直に言うと全体的に書き足りない部分が多く、もっと調べてきちんとまとめなければという反省は大いにあります。

坂口：先生が、これまでにお聞きになっていらっしゃる、このご本の評判、レスポンスにはどんなものがありましたでしょうか。

新井：今一番記憶に残っているのは「イギリスでも使用人のドラマがはやっているのには驚いた」というものでした。どこかの編集者の感想だったと思います。それから、あの本をきっかけに、スペイン人メイドを扱ったフランス映画（今月封切りの『屋根裏部屋のマリアたち』）や、日本の執事を扱った舞台のプログラムの解説のお仕事などをやらせていただきました。こういうお仕事をとおして、もっと外に目を向けて勉強するきっかけになるのをありがたく思っています。

坂口：今後、予定されているお仕事についてお教えいただけますか。

新井：次の仕事として、寄宿学校の歴史について勉強して執筆中です。また、今までイギリス文化ということで階級・使用人・寄宿舎などとイギリス国内にばかり目を向けてきたことへの反省と、『不機嫌なメアリー・ポピンズ』の中で一章として取り上げていながら、良く書ききれなかったという思いのある、イギリスの中のマイノリティについて集中的に勉強しているところです。本国との関係ということで、インド、アフリカ、ユダヤ、中国といろいろと広くて、まとめきれないのですが、とりあえずアフリカに焦点をおいて、ある時代を追って、興味深い点を取り上げていきたいと思います。

坂口：今日は本当に楽しいお話をたくさんありがとうございました！

＊

その他、新井氏が滞英中にご覧になった「シチュエーション・コメディ」にまつわる階級上昇と同族嫌悪、通われた3つの私立学校の設立目的やその中の階級問題、及び学校生活、イギリス美少年映画の系譜、イギリスドラマ・演劇・話題の本等について貴重なお話を伺った。

(2012年7月21日 15:00～ 新宿「椿屋珈琲店」にて)